

7	<p>精神分析学の創始者である（ A ）は、無意識の深層心理の分析や心理・性的発達理論を展開し、エリクソン（Erikson, E. H.）に大きな影響を及ぼした。</p>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>																		
8	<p>（ A ）は、その著書『人間の発達課題と教育』（1953年）において、幼児期から老年期までのライフステージについて記述しながら、それぞれの時期に達成すべき課題、すなわち（ B ）があることを指摘した。</p> <p>そして、（ B ）を成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になってくるとした。</p>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>																		
9	<p>（ A ）は、人間の一生を8つの段階に分け、それぞれの段階に固有の心理社会的危機や（ B ）が存在するという人格発達理論を掲げた。</p> <p>【（ A ）の発達段階】</p> <table border="1" data-bbox="271 865 1012 1309"> <thead> <tr> <th>発達段階</th> <th>「克服した状態」対「失敗した状態」</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>乳児期</td> <td>「（ C ）」対「不信」</td> </tr> <tr> <td>幼児前期</td> <td>「自律」対「恥と疑惑」</td> </tr> <tr> <td>幼児後期</td> <td>「自発性」対「罪悪感」</td> </tr> <tr> <td>学童期</td> <td>「勤勉」対「（ D ）」</td> </tr> <tr> <td>青年期</td> <td>「同一性」対「役割の混乱」</td> </tr> <tr> <td>初期成人期</td> <td>「（ E ）」対「孤独」</td> </tr> <tr> <td>成人期</td> <td>「生殖性」対「停滞」</td> </tr> <tr> <td>老年期</td> <td>「（ F ）」対「絶望」</td> </tr> </tbody> </table>	発達段階	「克服した状態」対「失敗した状態」	乳児期	「（ C ）」対「不信」	幼児前期	「自律」対「恥と疑惑」	幼児後期	「自発性」対「罪悪感」	学童期	「勤勉」対「（ D ）」	青年期	「同一性」対「役割の混乱」	初期成人期	「（ E ）」対「孤独」	成人期	「生殖性」対「停滞」	老年期	「（ F ）」対「絶望」	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
発達段階	「克服した状態」対「失敗した状態」																			
乳児期	「（ C ）」対「不信」																			
幼児前期	「自律」対「恥と疑惑」																			
幼児後期	「自発性」対「罪悪感」																			
学童期	「勤勉」対「（ D ）」																			
青年期	「同一性」対「役割の混乱」																			
初期成人期	「（ E ）」対「孤独」																			
成人期	「生殖性」対「停滞」																			
老年期	「（ F ）」対「絶望」																			

20	<p>初語の出現後、少しずつ有意味語は増加するが、子どもは、しばらくは単語1つで話す。この単語1つでの発話は、その場の状況や幼児自身の身振り、表情などに補われて、1語でありながら多様な意味の文と同じような機能をもつので、（ A ）とよばれる。</p> <p>1歳半頃以降、2つの言葉を連鎖させ、文法的構造を備えた（ B ）を話すようになる。</p>	□ □ □
21	<p>（ A ）は、人間には言語習得のための知的構造が生得的に備わっているため、短期間で言語を習得することができるとする（ B ）理論を掲げた。この言語習得のための知的構造は、特定言語の文法の情報ではなく、言語に普遍的に存在する文法構造についての情報と、周囲から聞く言葉を処理するための体系であり、言語獲得装置とよばれる。</p>	□ □ □
22	<p>幼児期の言葉は、基本的には、特定の親しい相手との1対1の対話の中で展開される。このような言葉を（ A ）とよぶ。（ A ）の特徴として、言葉のやりとりの内容が、言葉だけではなく、その場の状況などから理解でき、文法的に不十分であってもコミュニケーションがとれることがあげられる。</p> <p>書き言葉も加わり、学校の授業のように、話し手が不特定多数の相手に一方的に発する言葉を（ B ）とよぶ。（ B ）は学童期に入ってから発達する。</p>	□ □ □
23	<p>3歳頃になると、社会的な場面で、言葉がどのように用いられるかという知識（（ A ））を急速に獲得していき、話し相手によって会話の仕方が違ってくることが確認されている。</p>	□ □ □
24	<p>言葉は、コミュニケーションのほか、思考・想像や創造・行動調整などの機能も果たす。コミュニケーションのための言葉を（ A ）、思考を行うための言葉を（ B ）という。</p>	□ □ □

31	【(A) による遊びの発達の分類】		□ □ □
	何もして いない行動	興味をひかれるものをながめているくらいで、何もしていない（2、3歳以下）。	
	ひとり 遊 び	他の子どもとは関係をもたずに、自分一人だけで遊ぶ。	
	傍観的 行 動	他の子どもの遊びを観察しているが、一緒に遊ぼうとはしないで、ただ見ている。	
	(B) 遊 び	同じ場所で同じような遊びをしているが、独立平行して行う遊びで、一緒に遊ぶわけではなく、互いに影響を与えない。	
	(C) 遊 び	他の子どもと一緒に2～3人以上のグループで遊び、活動についてのやり取りや会話はあるが、集団は組織化されておらず、組織自体も流動的で活動にまとまりがない。3、4歳児にみられる。	
(D) 遊 び	一定の目的のために一緒に遊ぶ。複数の子どもが力をあわせて取り組む遊びであり、役割分担がなされリーダー的存在が出現し、集団として組織的行動がとれるようになる。		
32	(A) によると、子どもは、1歳に近づく頃から、目の前にいる人の身振りをそのまま模倣（(B) 模倣）するようになり、18か月頃から、目の前にはない以前に見たものを模倣（(C) 模倣）できるようになる。(C) 模倣ができるようになると、自分一人の個人的なつもり遊びから、相手のいる社会的な(D) 遊びへと発展していく。		□ □ □
33	幼児期においても、子どもは工夫をしながら、計算のやり方を発見している。 数を唱える(A)、ものと対応させて実際に数える(B)、付与された最後の数字が対象の集合の数を示す(C) の理解といった段階を経て計算機能を発達させていくのである。		□ □ □

8	<p>国立社会保障・人口問題研究所の「第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」（2021（令和3）年）によると、夫婦の予定子ども数が理想子ども数を下回る理由は、前回調査（2015（平成27）年）と同様に、「子育てや教育に（ A ）がかかりすぎるから」が最も多く（52.6%）、次いで「（ B ）で生むのはいやだから」（40.4%）となっている（複数回答）。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>
9	<p>成人期の職業生活においてみられる、仕事中毒（（ A ））、燃えつき症候群（（ B ））などといった過剰適応的行動は、老年期への移行に当たって問題となる。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>
10	<p>（ A ）は、老年期の心理社会的危機を「(自我の)統合」対「（ B ）」としている。老年期には、成人期までの自分の生き方を整理し、統合することが必要となる。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>
11	<p>カウフマン（Kaufman, S.）は、高齢者が新たに生み出し、維持するアイデンティティを（ A ）とよんでいる。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>
12	<p>近年、「抗加齢」「抗老化」という意味の（ A ）という言葉がよく使われるようになったが、加齢現象に逆らうことは不可能なので、加齢を受け入れながら心理的・社会的に満足できる幸福な老いが望ましいとする（ B ）という考え方も注目されている。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>
13	<p>知能には、（ A ）と（ B ）の2つがあるとされる。</p> <p>（ A ）は、新しい環境や場面、新しい課題に適応したり、新しいことを学習したりする能力であり、変化への素早く柔軟な対応を支える能力である。（ B ）は、過去の学習経験に基づく判断力や一般的常識、理解力など、経験に基づいて状況処理する能力である。</p> <p>これらの知能の発達には違いがあることが明らかになっており、（ A ）は加齢により衰えやすいが、（ B ）は加齢によっても衰えにくく、老年期まで発達し得るとされている。</p>	<p><input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/></p>